

「思いを馳せる」

お彼岸は、春分・秋分の日と前後三日の計七日間を指します。

「彼岸」とは、私たちが住む迷いの世界「此岸しがん」に対して、悟りの世界である「極楽浄土」を意味します。夕陽が真西に沈む春分・秋分の日が、遙か西の彼方にある極楽浄土への願いを確かなものにする日として最も適している、と説かれたことに基づいた行事がお彼岸です。

お彼岸にお墓参りをされる方は多いと思いますが、その際に「俱会くえい一処いつしよ」と刻まれた墓石を目にすることがあると思います。

これは浄土宗で扱った所とする經典「仏説阿弥陀経」に説かれたもので「人として命を終え、極楽浄土に往生した後、またそこで大切な人とも再会できる」という教えです。

「毎年よ彼岸の入りに寒いのは」

この俳句は正岡子規が母との何気ない会話を思い出して詠まれた句です。子規は母より先に亡くなりますが、生前は春彼岸を迎える度にこの会話を思い出し、無事に季節を迎えられる喜びと感謝を噛みしめていました。命終えた後は、お浄土で母と再会し、また何気ない親子の会話を楽しみにしていただくことでしよう。

法然さまも、大切な父母へ「両親に対する孝行の心をもって、父母を大切に思う人は、阿弥陀仏にすべてお任せするべきです。私が人として生を受け成長でき、往生を願って念仏を申せるのも、ただ父母が私を育ててくれたおかげです」というお言葉を残されました。このお言葉からは、常に自身の極楽往生を願うとともに、先立たれた父母を偲びお念仏をされていたことがうかがえます。

お彼岸は、自身の極楽浄土への往生を願うとともに、亡き方への真心を捧げることのできる大切な機会です。法要やお墓参りを通じて共々にお念仏を申しませう。

合掌